

Web学習システムを活用した英語教育の実践と課題(2)

江口 誠^{*1}

Towards an Effective Use of Web-based E-Learning System (2)

Makoto EGUCHI

要 旨

本研究は、日本人英語学習者を対象にした授業に於いて提供したMoodle上の課外学習課題を利用する際の効果や問題点について考察するものである。まずは分析の対象となる学習者の英語力から、成績の上位群と下位群に分類した。次に、eラーニングの学習記録とTOEIC IPテストのデータとの相関を求めた。最後に、オンライン上で実施したeラーニングアンケートの項目を分析することで、学習者がeラーニングを使用した学習に対してどのような感想を持っているのか、またどのような学習効果を実感しているのか、などについて調査した。これらの分析によって、主に6つの特徴的な結果が得られた。

【キーワード】eラーニング、Moodle、*t*検定、相関分析、アンケート

1. 調査目的

本研究の主な目的は、2015年度前学期に担当した2つのクラスの授業で利用したMoodle (eラーニングプラットフォーム) 上で提供した課題学習の効果を検証し、さらにはその問題点を探ることにある。筆者は2014年度後学期に教科書準拠型のWeb学習システム「成美堂リンガポルタ (LINGUAPORTA)」の学習効果とその問題点について検証し、受講者のeラーニングの学習記録とTOEIC IPスコアとの比較から、特に成績下位群のチャレンジ回数及び学習記録とTOEIC IPリーディングスコアとの間に負の相関がある可能性を提示した。学習者アンケートからは、成績下位群の学習者は成績上位群の学習者ほどeラーニング学習の効果を実感していないこと、成績下位群の一部の学習者はeラーニングの難易度について不満を持っていること、成績下位群の学習者ほど理想の自己と現実の行動の間には大きな隔たりがある可能性が確認された^{*2}。課題内容が出版社によって予め準備された既成のコンテンツであるために、学習者の英語力によって難易度を調整することが不可能であることがその一因であり、理想の自己と現実の行動の間の大きな隔たりという点に関しては、教員ではなくパソコン (もしくは情報携帯端末) を相手に英語学習を行うことが学習者の

^{*1}: 佐賀大学 全学教育機構

^{*2}: 詳細については、江口 (2015) を参照のこと。

動機付けを弱めている一因となっているのではないかと推測する。そこで今回は、教員が比較的自由に課題を作成することが可能となるMoodleをプラットフォームとして利用し、昨年度の実践例から得られたデータと比較しつつ、特に以下の点に注目する。

- (1) eラーニング学習記録とTOEIC IPスコアとの関係について
- (2) Moodle上で提供する課題学習のメリット及びデメリット、及び既成コンテンツとの比較について
- (3) eラーニングを用いた英語教育に対する学習者の考えや感想について

理想的には、今回の課題学習の実践前及び実践後に学習者の英語力を測ることが望ましいが、本学のテストスケジュール上やむを得ず2014年6月（もしくは7月）に実施されたTOEIC IPスコアのみを学習者の英語力の分析に使用する。

2. 授業の概要

筆者が2015年度前学期に担当した2学年の英語の授業では、課外学習として毎週Moodle上に作成した課題を学習することを成績評価の一部とすることを予め受講者に明示した^{*3}。その詳細については、以下の通りである。

【学習内容】

- 採用したセーグラーニング社のテキスト『Working in Japan』の追加教材の中から、原則として語彙の復習問題「Vocabulary Review」、リスニング穴埋め問題「Reading Passage Cloze」、及び作文問題「Reading Passage Expansion」（Moodle上では「Composition」という呼称を使用）の計3ユニット、さらにコースの後半（Unit 9以降）からは、テキスト本文掲載の語彙の予習問題「key Vocabulary」（Moodle上では「Key Vocabulary preparation」という呼称を使用）の1ユニット

【学習時期及び評価方法】

- 授業終了時刻から次回の授業開始時刻までに上記3ユニット（Unit 9以降は4ユニット）の学習を終了する

【評価方法】

- 上記3ユニット（Unit 9以降は4ユニット）の点数を合計し、授業の成績評価の25%に設定している^{*4}

^{*3}：学習者は佐賀大学eラーニングスタジオが管理する「科目履修用サイト（サイトB）」と呼ばれるLMS（学習管理システム）サイトにアクセスして学習する。詳細については、<http://netwalkers.pd.saga-u.ac.jp/elearning.html>を参照のこと。

^{*4}：各ユニットに於ける点数は、「Vocabulary Review」（10）、「Reading Passage Cloze」（15）、「Composition」（10）、「Key Vocabulary preparation」（10）の合計35点（Unit 9以降は合計45点）と設定した。

授業では上述の課外学習に加え、シャドーイング練習及びQuizlet^{*5}の2種類の課題を設定したが、いずれも授業評価の対象からは除外したため、本論文では扱わないことにする。因みに前者については、授業の最初にピア・レビュー形式で互いのシャドーイング内容をチェックさせてその結果を毎回記録用紙に書かせ、後者については各ユニットで学習した語彙をゲーム形式で復習して定着を図ることにその主眼を於いた。

3. 分析方法

分析の対象は、筆者担当の授業を受講したクラスA（文系学部2学年・41名・2015年度前学期）及びクラスB（理系学部2学年・27名・2015年度前学期）の合計68名である^{*6}。因みに本学における習熟度別クラス編成では、前者は中級、後者は中上級に分類される。

分析の資料となるのは、学習者が2014年6（もしくは7月）に受験したTOEIC IPテスト、Unit1からUnit13までのMoodleによるeラーニングの学習記録、及びeラーニングに関するアンケートの3種類である。

以上の方法で収集したデータ（アンケートを除く）はエクセル統計2012を用いて分析を行った。上述の調査目的(1)に関しては、平均値、対応のないt検定やスピアマンの順位相関係数を用い、アンケートデータのうち、自由記述等を除く40項目については集計し、それらを数値化して分析を行った。

4. 分析結果

4.1 学習者の英語力

調査目的の検証の前にまずクラスA及びクラスBそれぞれにおける学習者の英語力について確認したい。以下の表1は分析対象となるクラスA及びクラスBの合計68名と1学年全員のTOEIC IPスコアを比較したものである。表2はクラスA及びクラスBそれぞれのスコアの内訳である。両クラスのTOEIC IPスコアのリーディング(L)、リスニング(R)及びトータル(Total)それぞれの平均点を見てみると、全てに於いて若干全体平均より下回っているが、表2から明らかなように、これはクラスAの平均点がクラスBの平均点よりも100点程度低いことに起因する。次にこのスコアを大学生全体のスコアと比較してみたい。毎年TOEIC (IP)の実施団体である国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)が発表している資料『TOEICプログラム DATA&ANALYSIS』の最新版(2014年度版)によると、TOEIC IPテストを受験した大学生全体の平均点は、リスニング248点、リーディング192点そしてトータル440点であった。その中でも特に大学1年生に限って見てみると、リスニング237点、リー

^{*5}: フラッシュカードや小テスト等の学習機能に加えてゲーム要素が盛り込まれた無料の語彙学習サイト。音声や日本語訳の利用も可能。詳細については、<https://quizlet.com/>を参照のこと。

^{*6}: 実際の受講人数はそれぞれ42名及び32名の合計74名であるが、アンケートの回答が得られなかった学習者（それぞれ1名及び5名）は今回の分析対象からは除外している。

ディング188点そしてトータル424点であった。従って、分析対象となるクラスAの学習者の英語力は大学1年生及び大学生全体のいずれと比較しても大幅に下回っているが、クラスBの学習者の英語力については、全国の大学1年生よりも上回っており、大学生全体とほぼ同等であることが言える。そこで本論では、クラスAを成績下位群、クラスBを成績上位群として取り扱うことにする。

表1 2014年6月(7月) TOEIC IPスコア

項目	クラスA・クラスB					全1年生				
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	最低	最高	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	最低	最高
L	68	218.1	30.0	165	285	1343	223.8	-	-	495
R	68	163.3	37.4	95	245	1343	164.2	-	-	440
Total	68	381.4	52.5	310	465	1343	388.1	-	-	890

表2 2014年6月(7月) TOEIC IPスコア

項目	クラスA					クラスB				
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	最低	最高	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	最低	最高
L	41	202.2	22.8	165	250	27	242.2	22.5	205	285
R	41	139.8	20.4	95	190	27	199.1	27.7	145	245
Total	41	342.0	20.1	310	370	27	441.3	17.2	420	465

次にTOEIC IPスコアに表れた2クラスの英語力の差についてもう少し詳しく見てみたい。2つのクラスの受講生の項目別正答率の平均値の差を有意水準5%で両側検定の t 検定(ウェルチの t 検定)により検討した。その結果は表3の通りであり、項目別正答率L3以外の平均値の差は有意であったことが分かる。

表3 TOEIC IP項目別正答率の平均の差の検定結果

	クラスA (<i>n</i> =41)		クラスB (<i>n</i> =27)		<i>t</i> (66)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	<i>t</i>	<i>p</i>
項目別正答率L1	44.98	11.72	52.37	12.52	-2.44	.02
項目別正答率L2	40.24	9.81	47.41	8.81	-3.13	< .01
項目別正答率L3	48.98	10.50	53.48	8.94	-1.90	.06
項目別正答率L4	41.83	9.68	52.26	8.52	-4.68	< .01
項目別正答率R1	31.44	12.81	40.26	11.87	-2.91	.01
項目別正答率R2	35.59	11.76	49.59	12.14	-4.71	< .01
項目別正答率R3	33.93	11.48	42.33	11.16	-3.00	< .01
項目別正答率R4	44.56	9.52	54.59	8.34	-4.59	< .01
項目別正答率R5	42.78	10.68	54.93	10.82	-4.55	< .01

注：有意水準5%とした両側検定

即ち、クラスAとクラスBの英語力の差はほぼ全ての観点に於いて確認出来るが、項目別正答率L3については、平均値の差は有意ではないという結果が得られた。TOEIC (IP)における項目別正答率の詳細については本論では割愛するが、L3はTOEIC IPのPart 1とPart 2の正答率を指しており、つまりはこの項目の正答率が高ければ、比較的短い会話やトークが理解出来る能力を有していることを示している*7。

4.2 eラーニング学習記録とTOEIC IPスコア

次に、前回の実践例と同様、クラスA及びクラスBの学習者のeラーニングの学習記録とTOEIC IPスコアの各項目との関係について確認する。今回の分析の資料となる数値は以下の計21項目である。

〈eラーニングの学習記録〉

総点合計、Vocabulary Review合計（語彙の復習問題）、Key Vocabulary preparation合計（語彙の予習問題）、Reading Passage Cloze 合計（リスニング穴埋め問題）、Composition合計（作文問題）、Vocabulary Review平均、Key Vocabulary preparation平均、Reading Passage Cloze平均、Composition平均

〈TOEIC IPテスト〉

リスニングスコア、リーディングスコア、トータルスコア、項目別正答率L1～L4（リスニング）、項目別正答率R1～R5（リーディング）

eラーニングの学習記録について平均点を項目として挙げた理由は、課題を期間内に終えなかった場合に評点が0点となることから、そのようなケースを除外するためである。従って、本論ではeラーニングの学習記録に関しては合計点ではなく平均点を採用する。上記21項目それぞれの関係を検討するために、相関係数を求め、その結果は表4のようになった。Vocabulary Review (VR) と各TOEIC IP Listeningスコア、同Readingスコア、同Totalスコア、同項目別正答率R2及びR4の相関係数は、それぞれ $r_s = .34$ 、 $r_s = .51$ 、 $r_s = .53$ 、 $r_s = .41$ 、そして $r_s = .54$ であり、相関が確認できた*8。以下にその分析結果をまとめる。

- (1) Vocabulary ReviewとTOEIC IP Listeningスコアとの間には弱い相関がある
- (2) Vocabulary ReviewとTOEIC IP Readingスコア、同Totalスコア、及び項目別正答率R2及び項目別正答率R4との間には中程度の相関がある*9

*7 : http://www.toeic.or.jp/toeic/guide04/guide04_02/guide04_02_02.htmlに詳しい。

*8 : Key Vocabulary preparation (KVp) とTOEIC IP項目別正答率R4の相関係数は $r_s = .25$ であるが、KVpは予習課題であり、何度でも受験が可能となっているため、ここでは検討材料からは除外する。

*9 : 相関係数の解釈については、田中・山際（1992）に従った。

表4 eラーニング学習記録とTOEIC IPテストの相関係数行列

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1 評点合計	1.00																				
2 VR合計	.81	1.00																			
3 KVP合計	.72	.51	1.00																		
4 RPC合計	.89	.61	.55	1.00																	
5 C合計	.75	.61	.57	.49	1.00																
6 VR平均	.59	.86	.29	.44	.40	1.00															
7 KVP平均	.42	.42	.42	.35	.38	.40	1.00														
8 RPC平均	.69	.44	.34	.89	.21	.40	.25	1.00													
9 C平均	.43	.41	.22	.25	.71	.41	.47	.11	1.00												
10 Listeningスコア	.21	.34	.14	.12	.21	.34	.05	.01	-.03	1.00											
11 Readingスコア	.36	.50	.27	.23	.31	.51	.19	.17	.18	.25	1.00										
12 Totalスコア	.36	.51	.27	.23	.30	.53	.13	.15	.09	.73	.81	1.00									
13 項目別正答率L1	-.01	.06	.08	-.06	.00	.19	.00	-.07	.01	.34	.24	.35	1.00								
14 項目別正答率L2	.08	.16	-.04	.10	.05	.20	.11	.05	.06	.57	.10	.40	-.01	1.00							
15 項目別正答率L3	.03	.13	.00	-.03	.00	.18	.03	-.03	-.16	.40	.10	.28	.16	.03	1.00						
16 項目別正答率L4	.24	.26	.22	.16	.25	.15	-.03	.02	-.01	.72	.09	.47	-.03	.29	-.10	1.00					
17 項目別正答率	.15	.12	.24	.13	.19	.14	.03	.10	.01	.13	.37	.36	.09	.12	-.26	.24	1.00				
18 項目別正答率	.19	.34	.04	.07	.19	.41	-.04	.06	.20	.20	.49	.44	.11	.15	-.05	.18	.20	1.00			
19 項目別正答率	.09	.14	.21	.07	.08	.14	.14	.03	-.01	.09	.51	.40	.01	.12	.03	.03	.25	.03	1.00		
20 項目別正答率	.22	.43	.16	.12	.17	.54	.25	.15	.16	.09	.72	.52	.27	.00	.19	-.17	.02	.30	.30	1.00	
21 項目別正答率	.29	.33	.18	.18	.21	.23	.14	.10	.13	.17	.63	.53	.08	.03	.22	.02	-.08	.05	.06	.37	1.00

eラーニング課題の中でもTOEIC IPスコアとの相関が認められたのは、Vocabulary Reviewの設問であった。この課題は、上述のように毎回の授業（Unit）で学習する10個の語彙に的を絞った小テストであり、制限時間4分、受験1回のみ、そして組み合わせ問題という設定をしている。受講者の英語力との相関が確認出来た理由は、恐らくその出題形式にあると思われる。つまり、日本語から英語、もしくは英語から日本語といった単純な単語テスト形式ではなく、学習者にとっては未見の計10の文章の空欄に適切な語を当てはめるという、応用問題に近い形式となっている。制限時間も短いため、辞書等で文章中の未知語を調べる余裕もなく、また正しい解答を瞬時に文脈から判断する必要があるため、学習者が当該ユニットで学習した語の実際の使われ方や意味を理解しているかが問われる。

同じく項目別正答率についても検証したい。R2はPart 7の詳しい内容についての正答率であり、R4はPart 5やPart 6の語彙に関する問題、さらにはPart 7で出題される語彙に関する問題の正答率である。従って、Vocabulary Reviewの平均スコアとの相関が認められる結果が得られたことは、ある意味当然である。しかしながら、ここで言えることは、Vocabulary Reviewは復習問題であると同時に、学習者の総合的な語彙力が問われる設問でもあるということである。

5. 学習者アンケート

5.1 学習者アンケートの内容

次に、前回の実践例と同じく、クラスA及びクラスBの学習者に対して行ったアンケート調査の分析からeラーニングの効果や改善すべき点を探りたい。アンケートはMoodle上で2015年7月下旬から8月上旬にかけて実施した。その調査内容は、eラーニング（Moodleコンテンツ）の使用状況、課題の量や難易度、学習者の英語学習に対する態度、英語学習環境などである。以下の表5から表9にそれらの結果をまとめる^{*10}。

5.2 学習者の使用状況

まずは学習者のeラーニングの使用状況について確認したい。表5はeラーニングの使用頻度についてである。授業がある週は、毎回次の授業までの課題を課しているので、成績上位群もしくは下位群の差はなく、ほとんどの学習者が「週に1～2回」利用している。しかしながら、週に複数回利用している学習者はほとんどいないため、一度で終了できる課題量であって、何度もトライするような課題ではないことも推測できる。因みに昨年度の実践例と比較すると、同条件であったにもかかわらず、使用頻度は少々高くなっている。

表6はeラーニングを主に利用している場所についてのアンケートである。Moodleはスマホやタブレットからもアクセスが可能であるが、タイピングを要する課題もあるため、

^{*10}：学習者アンケートについては、昨年度実施したものとほとんど変わらないため、その詳細については、江口（2015）を参照のこと。

恐らく学習者はPCでアクセスしたものと思われる。昨年度と比較すると「自宅で」と回答した学習者の割合が低く、代わりに「その他」と回答した学習者が多くいた。これについては、どこで学習しているのかが分からないため、追加の質問をすべきであったが、恐らく大学外のネット環境のある場所で学習していることだろうと思われる。また、成績上位群と下位群で若干の差があることが確認できる。もし仮に下位群の「その他」と回答した17%の学習者が集中できないような環境下でeラーニング学習を行っているのであれば、学習の質に問題が生じている可能性がある。

表7はeラーニング学習を行っている時間を調査した結果で、複数回答を可としている。授業の空き時間の問題もあるのかもしれないが、成績上位群の4割近い学習者が平日の比較的早い時間に学習しているのに対して、成績下位群の学習者はその8割以上が平日の遅い時間に、そして1割強の学習者が平日の深夜に学習していることが分かる。これも集中力や学習の質に影響を与えている可能性がある。

表8は佐賀大学の学習者であれば誰でも使用することが可能なアルク教育社のeラーニング学習システム『ALC NetAcademy2』（NA2）の認知度を調査したものである。恐らく課外学習に積極的に取り組むであろう成績上位群の学習者については約8割強の学習者しかその存在を知らず、成績下位群の学習者については誰一人として知らないという結果になった。この項目については昨年度の結果よりも低い割合である。本学のポータルサイトからリンクを辿ると利用できるのだが、やはり英語の授業で利用を促すなどの必要性があるだろう。

表5 eラーニングの利用頻度

頻度	上位群		下位群		全体	
	n	%	n	%	n	%
月に1回	0	0	0	0	0	0
月に2～3回	2	7	0	0	2	3
週に1～2回	24	89	39	95	63	93
週に3～4回	1	4	2	5	3	4
ほぼ毎日	0	0	0	0	0	0
合計	27	100	41	100	68	100

表6 eラーニングの利用場所

場所	上位群		下位群		全体	
	n	%	n	%	n	%
自宅で	20	74	25	61	45	66
大学のPCを使って	5	19	6	15	11	16
大学内で自分のPCを使って	0	0	3	7	3	4
情報携帯端末等（スマホ等）で	0	0	0	0	0	0
その他	2	7	7	17	9	13
合計	27	100	41	100	68	100

表7 eラーニングの利用時間帯（複数回答可）

時間	上位群		下位群		全体	
	n	%	n	%	n	%
平日6時～12時	1	3.7	4	9.8	5	7.4
平日12時～18時	10	37	11	26.8	21	30.9
平日18時～24時	14	51.9	34	82.9	48	70.6
平日24時～翌朝6時	2	7.4	5	12.2	7	10.3
休日	11	40.7	2	4.9	13	19.1

表8 NA2の利用経験

	上位群		下位群		全体	
	n	%	n	%	n	%
存在を知らない	22	81.5	41	100	63	93
存在を知っているが、使ったことがない	5	18.5	0	0	5	7
使ったことがある	0	0	0	0	0	0
合計	27	100	41	100	68	100

5.3 eラーニング及び英語学習に対する感想・意識

学習者のeラーニングの利用状況の調査に続けて、ここではeラーニングや英語学習に対して学習者がどのように思っているかについてのアンケート結果について検討する。詳細については表9に示している。まず質問項目No.1からNo.3は英語（TOEIC）に対する学習意欲に関するものである。成績上位群・下位群の差はなく、ほとんどの学習者が成績向上を願っていることが窺える。しかしながら、質問項目No.30からNo.34を見てみると、「英語の勉強はつまらないと思う」と回答した学習者の割合については大きな差が出ており、成績上位群の93%は非好意的に回答しているにもかかわらず、下位群については66%にとどまった。質問項目No.31「もっと英語の文を読んでみたい」についても同様の傾向で、成績上位群の82%が好意的に回答しているのとは対照的に下位群については56%でしかない。つまり、成績下位群の受講生は、英語力やTOEICスコアをもっと伸ばしたいと思う一方で、英文を読むことには意欲が湧かないことが明らかになっている。

質問項目No.4からNo.10は、今回のeラーニング課題学習によって向上したと考える学習者の割合である。質問項目No.4「語彙の復習」が出来たと考える学習者は成績上位群では100%、下位群でも95%がそう思っていることから、ほぼ全ての学習者がそのように実感していることが分かる。関連して、質問項目No.10「意味が理解出来る単語が多くなった」についても、80%以上の学習者が好意的に捉えており、語彙という面においては、このeラーニング学習はかなり効果があったと考えてよいだろう。

質問項目No.5「発音の練習が出来た」については、全体で約70%の学習者が好意的に捉えている。上述のように、この授業ではシャドーイングを取り入れMoodle上で練習する形

式にしていたため、そのように回答した学習者が多かったと思われる。質問項目No.6からNo.9については4技能について個別に調査したものである。相対的にNo.9のスピーキング力の項目が低いが、これは現時点においてMoodle上で学習者のスピーキング力を向上させるような効果的な課題を設定することが困難であることに起因する。質問項目No.11からNo.13は教材についてのアンケートであるが、成績上位群の多くの学習者が好意的に受け取っていることとは対照的に、下位群の学習者については、その割合が若干低いことが窺える。

さらに注目すべきは、質問項目No.14「教材は自分の興味のある内容であった」とNo.15「eラーニングは英語力をつけるのに役立つ」である。No.14については成績上位群の約80%の学習者が好意的に受け取っていることに対して、下位群の学習者の割合は約50%に止まっている。今回使用したテキストであるセンゲージラーニング社の『Working in Japan』は、日本で働いている様々な国や職種の人々へのインタビューを元に作成された教材で、特にグローバルな視野を持って将来のキャリアを考えている学習者にとってはとても参考になるはずである。しかしながら、成績下位群であるクラスAは文系学部の中でも将来教員を目指す学習者が多く含まれているため、そのような教材には興味を持てなかったのかもしれない。No.15についても同様で、成績上位群は90%以上である一方で、成績下位群は70%程度しか好意的に受け取っていない。つまり、成績下位群の約30%の学習者は、eラーニングを利用した英語学習に意義を見だせていないことが分かる。この現象は昨年度と全く同一であった。その際は、既成のコンテンツであるが故に難易度に問題があったのではないかと考えたが、今年度は成績下位群の学習者にも難しすぎないように課題の難易度については配慮していた。つまり、難易度にかかわらず、英語力が低い学習者についてはeラーニング学習に取り組む意欲が相対的に低いことが推測できる。従って、そのような学習者に対しては、適宜ハンドアウト等を用いるなどしてeラーニングだけには頼らず、別の方法で課題を設定することも必要なのではないかと考える。これらと関連する質問項目No.22「eラーニングをこれからも続けてやってみたい」についても、成績上位群と下位群では20%弱の差が開いており、その傾向を裏付ける証左であると考ええる。

質問項目No.16「自主的に学習する習慣がついた」及びNo.17「集中して勉強できた」についても詳しく見てみたい。No.16に関しては、成績上位群の60%近い学習者が好意的に回答しているが、成績下位群の学習者については50%を下回っている。また、No.17についてはその差が際立っており、上位群の約80%が集中できたと回答していることとは対照的に、下位群については60%でしかない。これは、表6に示したeラーニングの利用場所と関係しているのかもしれない。つまり、下位群の20%弱の学習者は自宅や大学以外の場所でeラーニング課題を学習していることから、それが学習への集中を妨げている要因になっている可能性がある。

最後に課題についてのアンケート項目を見てみたい。質問項目No.38からNo.40はそれぞれ課題の量、内容そして難易度が適切だったかどうかを問うたものであるが、成績上位群

のほぼ全員がその全ての項目で適切だったと回答している一方で、下位群の約56%は課題の量に、約24%は内容に、そして22%は難易度に満足していないようである。この点は昨年度の結果とは異なる。これに関しては、例えば量について特にどのような課題内容を負担に感じたのかなどを追跡調査すべきかもしれない。

表9 eラーニングアンケート(1)

No	質問項目	好意群						非好意群					
		上位群			下位群			上位群			下位群		
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
1	英語の勉強は好きですか。	13	48	14	34	27	40	14	52	27	66	41	60
2	英語力を伸ばしたいですか。	26	96	38	93	64	94	1	4	3	7	4	6
3	TOEICの点数を伸ばしたいと思いますか。	25	93	34	83	59	87	2	7	7	17	9	13
4	語彙の復習ができた	27	100	39	95	66	97	0	0	2	5	2	3
5	発音の練習が出来た	19	70	28	68	47	69	8	30	13	32	21	31
6	リスニング力が伸びていると感じる	18	67	25	61	43	63	9	33	16	39	25	37
7	ライティング力が伸びていると感じる	13	48	24	59	37	54	14	52	17	42	31	46
8	リーディング力が伸びていると感じる	14	52	25	61	39	57	13	48	16	39	29	43
9	スピーキング力が伸びていると感じる	13	48	18	44	31	46	14	52	23	56	37	54
10	意味が理解できる単語が多くなった	24	89	33	81	57	84	3	11	8	20	11	16
11	教材は自分の英語のレベルに合っていた	25	93	33	81	58	85	2	7	8	20	10	15
12	教材の効果的な使い方が分かった	22	82	31	76	53	78	5	19	10	24	15	22
13	教材は自分の目的に合っていた	20	74	27	66	47	69	7	26	14	34	21	31
14	教材は自分の興味のある内容であった	21	78	21	51	42	62	6	22	20	49	26	38
15	eラーニングは英語力をつけるのに役立つ	25	93	30	73	55	81	2	7	11	27	13	19
16	eラーニングはTOEICのスコアアップへ繋がると思う	17	63	22	54	39	57	10	37	19	46	29	43
17	自主的に学習する習慣がついた	17	63	19	46	36	53	10	37	22	54	32	47
18	集中して勉強できた	22	82	26	63	48	71	5	19	15	37	20	29
19	学習習慣をつけることは大切だと思った	27	100	39	95	66	97	0	0	2	5	2	3
20	本やテキストで自主学習するよりもeラーニングを利用したい	11	41	18	44	29	43	16	59	23	56	39	57

表9 eラーニングアンケート(2)

No	質問項目	好意群						非好意群					
		上位群			下位群			上位群			下位群		
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
21	eラーニングをして英語が好きになった	8	30	11	27	19	28	19	70	30	73	49	72
22	eラーニングをこれからも続けてやってみたい	16	59	17	42	33	49	11	41	24	59	35	52
23	今のところ、この授業を楽しみにしている	16	59	20	49	36	53	11	41	21	51	32	47
24	英単語はあまり分らない	11	41	23	56	34	50	16	59	18	44	34	50
25	英語を読むことは簡単である	10	37	14	34	24	35	17	63	27	66	44	65
26	英語を発音することは簡単だと思う	5	19	7	17	12	18	22	82	34	83	56	82
27	この授業では、努力して勉強している	22	82	33	81	55	81	5	19	8	20	13	19
28	英語の授業ではよい成績を取りたい	26	96	38	93	64	94	1	4	3	7	4	6
29	分からない単語があるときは辞書を頻繁に使用する	25	93	35	85	60	88	2	7	6	15	8	12
30	英語の勉強はつまらないと思う	2	7	14	34	16	24	25	93	27	66	52	77
31	もっと英語の文を読んでみたい	22	82	23	56	45	66	5	19	18	44	23	34
32	もっと英語の文を書いてみたい	8	30	16	39	24	35	19	70	25	61	44	65
33	もっと英語を聞き取ってみたい	17	63	27	66	44	65	10	37	14	34	24	35
34	もっと英語を話してみたい	20	74	28	68	48	71	7	26	13	32	20	29
35	英文を読むときは、自分の読む速度は遅いと思う	17	63	28	68	45	66	10	37	13	32	23	34
36	英文を読むときは、内容がほとんど分からない	0	0	15	37	15	22	27	100	26	63	53	78
37	授業以外でも、英語を話すように努めている	0	0	3	7	3	4	27	100	38	93	65	96
38	課題の量は適切だった	25	93	18	44	43	63	2	7	23	56	25	37
39	課題の内容は適切だった	27	100	31	76	58	85	0	0	10	24	10	15
40	課題の難易度は適切だった	27	100	32	78	59	87	0	0	9	22	9	13

6. まとめ

以上、2015年度前学期に行ったeラーニングを利用した授業実践の分析を行ったが、主に以下のようにまとめることが出来る。

1. eラーニング学習記録とTOEIC IPスコアに関して、eラーニングの語彙に関する課題とTOEIC IP Readingスコア、同Totalスコア及び語彙に関する項目別正答率との間には中程度の相関がある
2. 学習者アンケートから、成績下位群の2割弱の学習者が自宅や大学以外の場所で課題に取り組んでおり、それが集中力や学習の質の低下を招いている可能性がある
3. 学習者アンケートから、成績下位群の学習者の8割以上が平日の遅い時間に、さらに1割強の学習者は深夜にeラーニングに取り組んでおり、集中力や学習の質の低下に関係している可能性がある
4. 学習者アンケートから、ほとんどの学習者が英語力やTOEICスコアの向上を願っている一方で、成績下位群の34%は英語の学習がつまらないと感じ、また英文を読むことに対する意欲が低い
5. 学習者アンケートから、ほぼ全ての学習者がeラーニングを利用した語彙習得に好意的な回答をしており、さらに実際に新たな語彙を獲得したと感じている
6. 学習者アンケートから、成績下位群の学習者は、eラーニングを利用した課題学習に対して相対的に否定的な感情を持っているため、それだけに頼らない課題設定を行う必要がある

最後に、本論では学習者アンケートの自由記述欄の内容については触れていないが、「Quizletでの学習が楽しかった」と回答している学習者が多く見受けられた。eラーニングの利用方法は様々であるが、本論における分析からも見出したように、学習者への動機付けや学習効果という観点からは、語彙学習が最も効果的であることが明らかとなった。今後も、引き続きeラーニングを利用した課外学習を継続して実施するとともに、適宜改善を行いたい。

参考文献

- 江口誠. (2013). 「第4章 e-learning教材を用いた英語教育の実践」. 『英語力向上に向けた愛知教育大学の挑戦－質保証と学習自律向上を目指して－』. 愛知: 中部日本教育文化会.
- . (2015). 「Web学習システムを活用した英語教育の実践と課題」. 『佐賀大学全学教育機構紀要』, 3, 69-86.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会. (2015). 『TOEIC®プログラムDATA & ANALYSIS 2014』. 参照先: http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/toEIC/pdf/data/DAA.pdf

- 竹内理. (2012). 「相関分析入門 (1)」。竹内理、水本篤 (編) 『外国語教育研究ハンドブッカー研究手法のより良い理解のために』。東京：松柏社。
- 田口達也、江口誠、井上真紀. (2012). 「第3章3.3 e-learningカリキュラム活用案パイロットスタディ」。
『e-learningとTOEICを活用した英語教育－教員養成の立場から－』。愛知：中部日本教育文化会。
- 田中敏、山際勇一郎. (1992). 『新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』。東京：教育出版。
- Gordenker, Alice and John Rucynski (2015). *Working in Japan: Video Interviews with 14 Professionals*. 東京：センゲージラーニング。